

特集◎たかが英語、されど英語 ——舞台芸術の“語学問題”

せっかく招聘しているのにどうして日本人のアーティストは他国のアーティストと交わろうとしないのか
——当財団が英語ワークショップをスタートさせたのは、海外ディレクターのこうした声が発端だった。
背景にあるのは、英語教育なのか、日本人の気質なのか。
日本の舞台芸術が注目される機会が増えるなか、今一度英語を通して芸術活動について考えてみたい。

01 刀祢館正明◎「言いたいこと」こそ最大の強み	p.001
02 ニック・カーター◎Real Artists: Real Conversations?	p.005
03 西尾佳織◎言葉からもれるもの	p.007
04 筒井 潤◎単語帳	p.010

01

刀祢館正明

Masaaki TONEDACHI

「言いたいこと」こそ最大の強み

5年前から新聞で「英語をたどって」という、英語についての連載を続けている。英語という言葉そのものを扱うというよりは、私たちに
とって英語とは何なのか、私たちはなぜこんなに英語に苦勞するのか、
あるいは苦勞させられるのかを考えたいと思って始めた。この原稿
を書いている2018年3月現在、第6部まで、計44本書いてきた。映画『スター・ウォーズ』にならって第9部までは続けたいと考えている。

英語とは英語教育のこと?

英語についての連載を始めてから、不思議なことに気づいた。読

者や同僚から「おまえの英語教育の連載は良い/悪い」といわれることだ。読んでもらえるのはありがたいのだが、でも、困惑してしまう。また、「英語について取材したい」とお願いすると、学校英語の批判を始める人が少なくない。「話せない、使えない英語教育を変えないといけな」と力説される。こちらは英語教育の取材だとは一言も言っていないのに。

確かに、英語教育についても書いてはいる。でも、全体では広い観点から英語について扱ってきたつもりだ。例えば東京オリンピック・パラリンピック招致の際のプレゼンターや、沖縄の米軍基地問題に絡んだ問題や、NHKの朝ドラの俳優の特訓や、カタカナ表記への異議や、日本人歌手の発音、「黒船」ペリー艦隊来航時の通訳などなど。でも、なぜか「英語教育の連載」に見られてしまう。「英語とは英語教育のこと」らしい。

まるで「話せない・使えない」のは英語教育のせいで、英語教育が良くなればすべて解決するというコンセンサスがあるかのようだ。一方で、その英語で何をするのか、何を話すのか、目的や中身については、なぜかあまり語られることがないように思う。英語教育論議に比べると、熱量も少ない。これは、言うまでもないほど自明だから

か。みんな実はわかっているからか。それとも、目的や中身なんてそれほど大事ではない、大事なのは英語力だと思っているからか。このところ、ずっと考えている。

コツコツ勉強しても

私自身は英語がすごく得意とか仕事でバリバリ使っているというわけではない。英文科卒ではないし、帰国子女ではない。若い頃に留学経験があるわけではない。新聞社に入ってからもずっと国内畑。たまに海外出張はあっても海外特派員の経験はない。外国に住んだのは

40代半ばになって「シニア研修」でロンドンに半年出してもらったことだけ。日本で生まれ、日本で育ち、日本の学校を出て、日本の会社に入って、日本の人たちを相手に日本語で仕事をしてきた。純然たる国内派だ。たぶん、この原稿を読んでいる人たちの多くと、仕事の領域は違っても英語については似たり寄ったり、いやいや、私の方がずっと英語度が低いのではないかと思う。

「英語をたどって」を続けるなかで、あらためて気づいたことがいくつかある。その一つが、英語をコツコツ勉強して英語力が身につけば、国際的な場で英語で議論したり質疑応答したりできるようになるわけではない、ということだ。そのことを北関東の高校生たちから教わった。

高校生の英語ディベート大会がある。ディベートとは言葉と論理の格闘技だ。それを100%英語で行う。数年前の全国大会で、英語教育が売りの強豪校を次々と破って優勝したのが、栃木県の宇都宮高校の男子生徒たちだった。

彼らは日本代表チームとして世界大会に進出。だが歯が立たない。予選の相手はタイ、トルコ、チェコ、アラブ首長国連邦、スウェーデン、インド、レバノン、ボスニア・ヘルツェゴビナの8カ国。英語圏ではないということではどこも日本と同じだ。

結果は1勝7敗(この1勝は日本代表として3年ぶりの勝ち星だった)。顧問の先生は「惨状」と表現したほど。何が違うのか。

議論の基礎体力

彼らに聞くと「外国の高校生は議論するのが当然、主張するのが当然という感じだった。でも僕らは日本でふだん、議論する必要がない。へたに議論しようとしたら、煙たがられてしまう」。

なるほど。私たちは小さい時から学校で、日常生活で、どれだけ議論や主張をしてきただろう。それも当然のように。もちろん、大人も同じだ。議論が特別な国の我々と、議論が当たり前の国の人たちとは議論の基礎体力が違う。これでは英語、英語と追いかけてもだめ。国際的な交渉や論争の場で苦戦するはずだ——。こんなことを「英語をたどって」の最初のシリーズで書いた。

かつて「恋愛体質」という言葉がはやったことがある。それにならっ



雑誌やムックは英語特集が大はやり。写真は筆者が見つけたものから

て「議論体質」と呼んでみたくなる。この議論体質、あなたはどうか。議論することが当たり前の生活をしてきたらどうか。

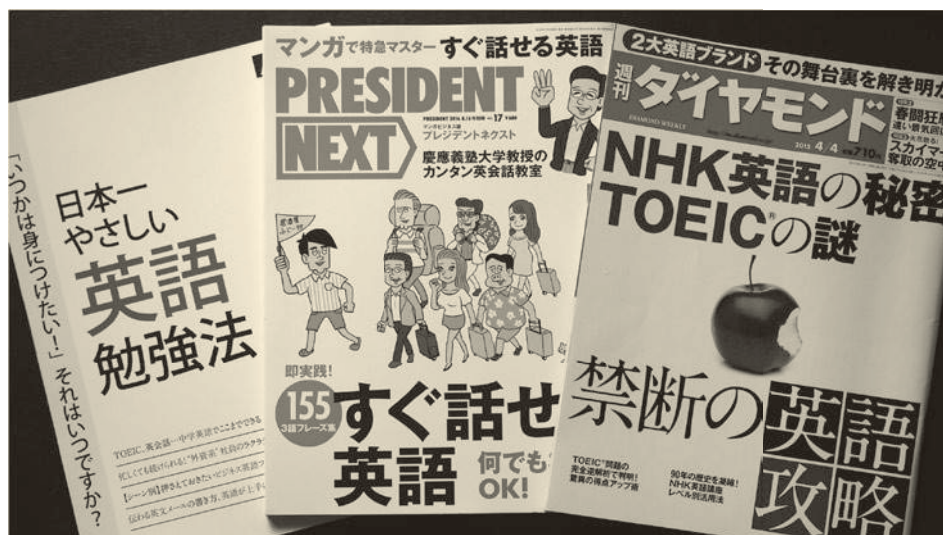
主張する、質問する、疑問を口にする、反論する。小さい頃から普段の生活の中でやってきた人たちと、そうでない我々と。これでは英語力だけいくら身につけても、もともと議論に慣れていなかったり、議論体質が希薄だったりしたら、英語で議論などなかなか出来ないだろう。

以前、イスラエルに留学した日本人女性からこんな話を聞いたことがある。街を歩いていたら、自分より若い男の子が英語で話しかけてきた。「僕と付き合ってほしい」という。「だめ」と答えたら、「なぜだめなの?」と聞いてくる。「なぜ僕じゃいけないの?」と言って放してくれない。「あなたは若すぎるから」と答えたら、「君は何歳なの?」「なぜ僕が若いと付き合ってくれないの?」と食い下がってくる。言い寄ってきたのは彼の方だが、それを断るための「立証責任」は言われた側にあるといわんばかり。「ナンパもディベートなんですね」と彼女は苦笑いしていた。

たわいもないゲームといえばゲームだが、慣れていないとおろおろしてしまうだろう。英語をまじめに勉強し、リスニングを鍛えていれば、彼の話す英語の意味はわかる。でも、その場で的確に応じるには、英語力だけでは無理だ。ディベート力、議論力が必要に違いない。あるいは「だめなものだめ」と強く言い切る迫力、胆力か。

政府の行動計画

政府が「英語が使える日本人」の育成を目指し、そのための「行動計画」を策定していたことをご存じだろうか。文部科学省のホームページに文書がある。「国民全体に求められる英語力」の目標として、「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことを掲げている。大臣名で発表し、学校関係だけでなく自治体や経済界、保護者にも「改善に取り組まれるようお願い」したのは2003年3月だから、もう15年になる。そろそろ「英語が使える日本人」があちらこちらに登場するなど、行動計画の効果が出ていてもおかしくないころだが、どうだろう、実感はあるだろうか。



「すぐ話せる」「日本一やさしい」……こう言われたら、手に取りたくてしまう

英語を英語としてコツコツ勉強しても、使えるようになるとは限らない。たとえTOEICやTOEFLで高得点をとっても、英語で発表したり質疑応答をこなしたり討論したりできるとは限らない。英語学校で、社会人の勉強会で、私よりはるかに高度な英語力を持っているのに、「英語で何を話したらいいのかわからない」「話したいことがない」という英語学習者たちを何人も見てきた。英語力と、自分の意見や自分のことを表現する・出来ることとは、違う次元の話なのだ。本当に鍛えるべきことは英語の外にある。そのことにそろそろ気づくころではないか。

かつて、日本が米欧から激しく叩かれる「ジャパン・バッシング」が盛んだった時代があった。日本のメディアは日本批判を連日のように報じたが、米英のメディアに日本の反論が載ることは、投稿欄を含め、極めてまれだった。当時新聞社で内勤職場にいた私は「日本にも英語が出来る人はいる。彼ら彼女らはなぜもっと主張しないのか」と腹立たしく思っていた。英語の使い手たちは何をしているのか、言われればなしでくやしくないのか、得意の英語を使って反論したらいいのに、と。

言いたい自分と言えない自分

一方で、話したいこと、主張したいことはたくさんあるが、それを英語でうまく表現できない、どう言ったらいいのかわからない、自分の英語力が追いつかない、という人たちもいる。そういう人たちにとって、英語で自分の意見や主張を話すというのは、つらい作業だ。言いたいことが言えない。「言いたい自分」と「言える自分」との間に大きな距離がある。話そうとすればするほど、話したいことから離れてしまう感じがする。もどかしい。

これまで習得した限られた語彙と限られた文章を使って表現していくしかないが、それではうまくニュアンスを伝えられない。それどころか、なんとというか、自分が馬鹿になったような、あるいは幼くなってしまったような、そんな感覚に陥る。日本語だったら言えるのに、ああ、もういやだ、こんな役回り、引き受けるんじゃなかった……。英語での授業、会議、討論、シンポジウム、ワークショップ、講演などに一度でも話す側として出たことがある人には、わかってもらえると思う。

このもどかしさ、苦しさは、ネイティブスピーカーの語学教師の場合、よほど経験や訓練を積んだ人でないと、なかなか実感できないことのようなのだ。彼らはレッスンで「思ったように話してみよう」とか「恥ずかしがらずに、間違いを恐れずに」とか言いがちだが、そんな次元の話ではない。

一方、日本人も含め、英語の先生たちは「だからもっと表現を覚えましょう」と言いがちだ。そして「こういうときはこう言います」「英語にはこういう表現があります、使ってみよう」と教えようとする。それもたしかに大事なのだが、いったいつ終わりがくるのか、見えない。もっとも

と、の世界が待っている。あるいは、頭の中に英語表現のデータベースを作って必要に応じて出せばいい、的なものを感じてしまう。ああ、やっぱり勉強か、と思ってしまう。しかもその表現は他人が並べたものだ。自分が使いたかったもの、じっくりくるものとは限らない。教材の例文とはしょせん、他人が作ったもの。あなたが言いたいことがそこにあるとは保証してくれない。

腹をくくる

この原稿の読者の多くは表現の世界に生きる人たちとのこと。誰かの意見や見方を紹介したり訳したりするのはなく、「ほかの誰でもない自分」が考えていること、感じていること、訴えたいことを表現する、そういうことをしている人たち。それならなおのこと、「言いたい自分」と「言えない自分」との距離感はずいぶん、借り物の表現では自分のことを表していると実感しにくいだろう。

ではどうすればいいか。これまでいろいろ取材したり読んだりしてきたが、特効薬は、残念ながら、ない。あればとっくに誰かが見つけて発表し、あつというまに広まっているに違いない。

特効薬でも即効薬でもないが、これまで取材してきたなかで、いくつかのヒントになりそうなことがあるので、書いてみたい。

まずは腹をくくること。「言いたい自分」と「言えない自分」の距離をいったん受け入れ、それに耐えること。そういうものだどと覚悟を決めてしまうこと。

そのうえで、自分の言いたいことと同じ内容を、簡単な、シンプルな日本語で言い換えてみる。例えば中学生にもわかるように、おばあちゃんにもわかるように。ただし内容のレベルは落とさない。日本語から日本語へ「日日翻訳」と言ったらいいだろうか。近年、外国人居住者が増えていることから、各地の自治体でこうした動きが進んでいる。参考になるかもしれない。

いったんわかりやすい日本語に頭の中で置き換えると、それを自分の使える範囲の英語で表現することが、その前よりやりやすくなる。だまされたと思って試してみてほしい。その過程で自分の考えを再整理したり、コアを抽出したりすることが出来るというありがたいおまけが付いてくるかもしれない。

外国人への英語インタビューでプロの通訳者に通訳をお願いすることがある。聞いていると、うまい通訳者ほど難しい英語は使わない。私が発した日本語を、なるほどと思うような、シンプルでわかりやすい英語にしていく。

聞くと、日本語をそのまま英語に訳すのではなく、意味内容の核をとらえ、それを英語にするという。日本語と英語とでは言語の構造が大きく異なり、そのままでは互いの言葉になりにくいし、かえって伝わりにくい。しかも元の言葉と訳したあとの言葉では、あとの方が長くなりがちだ。言いたいことの核心をつかみ、それを英語として不自然ではない表現にしていくという。

また、日本で開かれる、様々な国や地域の人たちを集め英語で行われるシンポジウムや討論会でのやりとりも参考になるだろう。同じ分野の人たちや隣接分野の人たちが出てくるものもいい。出席者たちは司会、プレゼン、討論、質疑で、どんな表現を使っているのか。それを知るいい機会になる。これを使いたかった、なるほどこう言えればいいのか、わからなかったのはこれか、ということがあるに違いない。特に参考になるのが、同じ東アジアを中心にした、英語のネイティブスピーカーではない人たち。外国語として英語を使っている人たち。彼ら彼女らだって苦労してあそこまでとり着いているのだから。

もちろん、メインは彼ら彼女らの発表や議論や質疑の中身だ。英語はついでの話。英語の勉強、などと構えることはない。一つでも二つでも「そうか」「これが言いたかった」というものがあればラッキー、ぐらいで。

空気を読まない

英語を使う場で一番困るのは、話された英語そのものがわからないときだろう。質問を受けても何を聞かれたのかわからない。議論の流れから置き去りになっていたら司会から指名された。さあ、どうしよう。そういうとき私たちは「ああ、やっぱり英語は難しい」「自分に英語力がないからだ」と、自分に責任があると思いがちだ。

ここでも腹をくぐること。わからないことはあるのだ、と。思い出してほしい。日本語で質問を受けても、いったい何を聞かれているのかわからない、ということはないだろうか。わからないからといって、あなたに責任があるとは限らない。

わからなければ、聞き取れなければ、「質問は大変ありがたいのですが、よくわからなかったので、もう少しわかりやすく/具体的に/絞って/くれませんか」と聞き返してはどうだろう。これは討論の時も同じ。それでもわからない時は？

とっておきの妙案がある。大きな声では言えないので、ここだけの話にしておいてほしい。

それは、空気を読まないこと。無理して合わせようとしなくていい。何を聞かれていようと、流れがどうであろうと、その場で言いたいことを言ってみてはどうだろう。完全な受け答えや正しい発言をしようと思わないこと。だって、日本語のときだって、そういう人、いません？

「いい質問だと思うが、むしろこの点から考えてみてはどうだろう」「その点について私はこういう考え方をしている」という形で議論を展開する、引き込む。理解出来ていたところまで(勝手に)戻って「実は、言いたかった大事なポイントがある」と流れを変える、あるいは作って

しまう。

……というのはどうだろう。もしかしたら司会者や出席者、聴衆は「そうそう、あなたからそれが聴きたかった」と喜んでくれる、かもしれない。黙っているよりずっとましだと思うのだが。

私自身、イギリスの大学にしばらくいたとき、あるいはオーストリアでの世界各地からの参加者による討論会宿に参加したとき、何度か目にした。ならばと自分もやってみたこともある。

それを英語でどう言うのか、ですか。それは皆さんなりに、自分の英語でつくってみてほしい。

繰り返しになるが、表現の世界で仕事をしている皆さんには、言いたいことがある。それを知りたい人たちがいる。それは最大の強みだ。その強みを活かして欲しい。

あなたの前にいる人たちは、あなたの英語を聞きたいのではない。あなたのこと、あなたの考え、あなたの活動を聞きたいのだから。

最後に。シェイクスピアによると「この世はすべて舞台。男も女もみな役者に過ぎぬ」(河合祥一郎訳)とか。国際的な舞台上で、英語で表現する人の役を、どうか存分に演じてほしい。本稿が少しでも皆さんのお気に召して、そういう人たちが今後もっとももっと出てくることを願っています。



photo: 渡辺幹夫 Mikio WATANABE

刀祿館正明 (とねだち・まさあき)

朝日新聞記者。早稲田大学政治経済学部卒。1982年朝日新聞社入社。地方支局をへて整理部、朝日ジャーナル編集部、アエラ編集部で記者、編集者。学芸部、オピニオン編集部で記者、デスク。論壇やアカデミズムを軸に取材してきた。オピニオン編集部では「インタビュー担当」「質問担当」の編集委員。論や主張を聞き出したり、あえて天の邪鬼的に質問したりするスタイルを心がけてきた。英国のLondon School of Economics and Political Science (LSE) 客員研究員、早稲田大学非常勤講師も。記事所収の書籍に『奔流中国』『3.11後ニッポンの論点』など。現在は夕刊で英語と私たちの関係を考える「英語をたどって」シリーズと、日本と隣の国・地域とのボーダーエリアを歩く「国境をたどって」シリーズを続けている。